オーストラリアから下諏訪へ

東赤砂　岸田　たや

友達と御柱を楽しむ

日本との出会い

初めて日本と出会ったのは、四年生の頃でした。外国人の英語の先生がいる下諏訪町の小学校のように、私が通っていたオーストラリアの田舎の小学校には、日本人の日本語アシスタントの先生がいました。あいさつ、折り紙などの色々な日本の文化を教えてくれてとても印象的でした。今まで出会った文化とまったく違い、その時から日本にとても興味を持ちました。

父の仕事の転勤で、ケアンズと言う町に引越しました。ケアンズで私の人生を変える下諏訪の人に出会いました。日本語が大好きな私に、高校を卒業してから初めてのホームステイをさせてくれました。空手、書道、生け花など、色々な日本文化と日本の人と触れ合いました。面白くてもっと日本語をしゃべれるようになりたいと思いました。

日本にやって来て

大学では化学を専攻し、卒業後、下諏訪の小学校で英語を教えることになりました。日本の子ども達は素直でかわいく、毎日楽しく学校で教えることができました。身ぶり手振りで、少しずつ日本語をしゃべれるようになりました。日本語ができるようになってくるにつれて、もっと深く日本に溶け込むことができました。

ある日、レガッタをする町のチームに入らないかという誘いの電話がありました。それでボートをやることになりました。私には初めての経験でした。きれいな朝日を浴びながら、気持ちよく漕ぎました。新しい仲間ができただけでなく、手にたこもまめもたくさんできました。とてもとても楽しくて、みんなと全国大会まで行き、そのうえ優勝までできてうれしかったです。

だんなさんになった人と

もうひとつの出会い

レガッタの友達の家でバーベキューをやった時、初めて私のだんなさんになった人と出会いました。その日、だんなさんが自分で作った美味しい料理を持ってきたことを覚えています。英語も上手で、私と同じように旅行とアウト・ドアに興味をもっていたので、すぐ仲良くなれました。夕日の諏訪湖でプロポーズされ、上社で結婚式を挙げました。山口県の人とオーストラリアの人が下諏訪でつながっているのは、ふしぎな縁です。

この頃、オーストラリアがとても遠くに感じます。日本が大好きだけど、オーストラリアにいなくて寂しい…。日本とオーストラリアのことを考えると、お母さんかお父さんか、どちらかを一方を選ぶような気持ちになります。私にとってはどちらもかけがえのない大切なものです。

今私は、自分がオーストラリアの大学で学んだ化学の勉強を生かした、薬品会社の品質管理の仕事をしています。難しいことばかりですが、頑張っています。新しい挑戦と苦労がないと、人は成長しないものですから…。

■下諏訪町図書館の７月の休館日は、４・11・19・20・25・29日です。

雑貨としてのステンドグラスを

中央通　伊東　彩

ステンドグラスとの出会いは、両親の知人で、ステンドグラスの制作をされている先生のアトリエを訪れたことがきっかけでした。先生の作られた様々な作品を見るうちに、宗教的な意味合いのあるものや高級調度品といった、どこか自分とは程遠いと思っていたステンドグラスのイメージが変わり、「ガラス」も「作る」ことも好きだった私は、漠然とそれが自分の仕事になっていくのでは…と思っていました。

先生のもとで基本的な技法を学び、イタリアフィレンツェへの留学を通し、その思いはより強く具体的になっていきました。ガラス自体の輝き・光を受けたガラスの不思議な影を楽しめ、日常的に長く使えるステンドグラスを作りたい。その思いからデザインはよりシンプルに、色みも落ち着いたものになっていきました。制作を重ねるうちに、「そういうものを望んでいた」という人が意外と多いことを知り、工房やアトリエという形よりも、普段立ち寄る雑貨屋の一角にあったほうがより親しみやすいのではないかと、ステンドグラスのある雑貨屋を目指すようになりました。

理想の店づくりを

数年前から、そのための物件を生まれ育った上伊那を中心に探していたのですが、なかなか見つからず、たまたま商品に使う革紐を仕入れに訪れた御田町のレザーショップで話をしているうちに「近くに良い物件があるかもしれないよ」と聞き、おかみさん会の方々を紹介していただきました。当初は慣れ親しんだ地元を離れることに戸惑いもありましたが、よく遊びに来る大好きな土地であったことと、この土地の人たちが本当に温かくよそ者の私を受け入れてくれたこと、そしてまわりには同じように個人で開業し頑張っている先輩が多いことが本当に心強く、また良い刺激があるのでは…と思えたことで決心がつきました。縁あってここに来られたことを本当に嬉しく思います。

自分の理想とする店を作るとともに、ここへ来るためにお世話になった方たちにもいつかは何かお返しできるように、またこれから新しく入ってくる方にも、私がしてもらったのと同じように温かく接することができたら…ともうひとつの目標もできました。

七月のこえ

午前二時に起床して、車山肩の駐車場へ向かった。午前三時過ぎには、ライトをつけてカメラなどを背負って歩き出した。車山乗越を経て、山彦谷南の耳（標高一八三八ｍ）まで、約一時間強の行程である。なだらかな草原の中で少し小高くなっている南の耳には、なんとか日の出前に到着した。

太陽が顔を出す前の天空の色に言葉で表現出来ない美しさを感じる。漆黒の闇から青に変わり、時々刻々と色合いを変容させていく大自然のドラマを眺めていると、写真を撮ることを忘れてしまう一瞬でもある。日が昇り、ガスが流れ出し朝日に染まり始めた光景に遭遇（そうぐう）すると、畏敬（いけい）の念を強く思う。

感性を磨くことが、一生の課題なのかと考えながら帰路に着いた。

（古屋）